
Princess × Princess ~ 8時間だけのお姫様 ~

サンタモニカ美冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Princess x Princess ～8時間だけのお姫様～

【Nコード】

N5336BA

【作者名】

サントモニカ美冬

【あらすじ】

とある事故がきっかけで、どこかの世界の小さなお嬢様の執事に雇われた私『コウちゃん』の不思議生活は、我がままお嬢様や傲慢奥様との高貴な生活だけではない。午前9時から午後5時までの8時間、私は元の世界の何処かの誰かになってしまふのだ——

プロローグ？

作って欲しい手料理の定番といえば……そう、『にくじゃが』だ。
この回答は定番中の定番、ド定番。

全国何万の男女が共に理解している事実中の事実。
その知名度はギリシャ神話の神々をも超えるだろう。
ジャパンの手作り料理の神『にくじゃが』。

その神が周知の事実となった時代の愚かな男女。
女どもはとりあえず『にくじゃが』といえば好感度ゲージが上昇
すると思いこみ、そして男どもはその神の名前を聞けばまんまと好
感度ゲージを上昇させる。

ああ。

なんともまあ。

……馬鹿ばっか。

などという思考を持つのが今日の俺。

「ねーねー、飛鳥^{あすか}君さあ……最近どお？」

甘ったるい香水の香りと、明らかに普段喋る時とは違う甘ったる
い声。

軽々しいボディタッチと、馴れ馴れしい距離。

「ねえったら、飛鳥君。何か浮いた話ないの？」

たいして親しくも無いのに一々名前で呼ばれるウザさに加え、い

きなり近況報告を迫られるダルさ。

「はっ、浮いた話？ えー、あれね。ラピ。タ、ラピ。タ。すつ
げー浮いてた」

「もおお、違うつてばあ」

口元を左手パーで隠し、右手でパシパシと肩を叩きやがる。

この距離感なんなんだいったい。いつお前と俺がそんな他愛ない事で笑い合う良い感じの仲になったんだよ。

ほら見る、ちよつと遠くの第三者からするとちよつと良い雰囲気と勘違いしてる奴とかいるだろ。

「もおもお」

「牛の物まねか、うめーな。体系ももう一息じゃん、頑張れよ。リアル牛イケンじゃん」

「ひつどおーい。そんなことないもん、姫希ちゃん太^{ひめき}ってないよ？ お腹触ってみる？ 引き締まってるよ、ちやつかり引き締まってますよお」

「ちやつかりしてんじゃねーよ。ほら消えろ……しっし、邪魔なんだよ」

「ええ、もお部活っちゃうのお？ 姫希ちゃんと姫姫していこう
おーよお」

「うつぎ、テメうつぎ。んだよ姫姫って……ちよつとエロいこと考え
ちやつうじゃねーか」

「わっ、飛鳥ん変態い……待つて待つてグラウンドまでお供する
する。だからきびだんご……」

かー、うざい。

なんなんだよこのシューティングゲームのオプションみたいな女
いや、コイツだけに限らず女という生き物の大半はコイツに類似

している。

ちよつといいなと思えば近づいて、マイブームされば自ら遠ざかる。

まあ。

別にそれをどうこう言うわけじゃないが、この種の馴れ馴れしさにもはや感服する。

妙な所が繊細なくせして、大事なところは凡そ計算。
馬鹿らしい。

「今日は打つの？ 投げるの？」

「とりま鬱だな」

「じゃあ私応援するからあ、イッパイ打ってねっ!!」

「は？ んじゃお前に向かって撃つから、覚悟しとけ」

「きゃあああ、マジマジい!!？ 今の新手の告白う!!？」

ああ。

会話が成立していない事に今気がついた。

「……死ね」

「やあだっ」

マジ……コイツ……殴りてえ。

「子供は何人作るう？ やっぱ野球チーム作れるくらい？ てか野球で何人スポーツ？ 11人だっけ？」

欠伸をしつつ、聞いていないフリだ。

無言でそっぽ向いとけば、妙な質問攻めは容易くかわす事が可能だ。

「でさあ——なんだよねえ、すごいっしょ？……なわけ！！
したらアッコがさ——みたいなあ！！　馬鹿だよね」

スゲーな、あたかも俺と会話してるみてーになってる。

マシガンのように乱射される言葉を数々は俺の無視という鉄壁の防弾チョッキに阻まれているというのに。

というわけで、そろそろ部室が見えて来た。

野球部の部室だ。

ここに来て陸上部です、などという妙なオチはなく、当然俺は野球をする為にここに来た……即ち俺は野球部の一員である。普通の

……高校生……だ。

そつ、俺は普通の高……校生。

一般的な、どこにでもいる……高校生……だ。

「んじゃな、馬鹿。次俺の人生の妨げになるようだったら容赦しねーから」

ちょっとダサイ台詞のような気がしなくてもないが、まあコイツにはコレくらいリアルを超えた言い方しねーと——

「え、ダサっ」

……俺は傷ついた。

「んじゃな」

今日は特に何も1日だったな、と思いつつも今日一日退屈しなかった要因はやはりコイツだろう。

もっと長く付き合えば（友情）、もっと楽しいのだろうな……な

んで。

「うん。応援してるからねっ……チュッ」

投げキッスを手刀で横真っ二つ切り裂いて、俺は部室へ向かった。

普通。普通、ああ普通。

俺は普通の高校生……ではない。

強調するほど胡散臭くなるので、早めにネタばらしをするが、俺は普通の高校生ではない。

普通の高校生でなければ、異常性欲者でもない。

異常性欲者でなければ、神様でもない。

神様でなければ……。

関連性はなかったが、とにかく普通じゃない。実はそれが俺の誇りであり——悩みの全てだ。

けれど、普通に憧れたりはしない。

俺は、今の生活に不満はない。

昔に戻りたいなんて……ことも……ない、と思う。

部室のドアに入る前、腕時計は午後5時を指していた。

「……只今戻りました」

私の朝は早い。

毎朝7時には起きなければならない。苦行だ、人生は苦行。

「お嬢様、おはようございます」

「くかー」

「姫子お嬢様、朝でございます」

「……………くかー」

「今チラツと薄目でこちらを見ましたねお嬢様、起きてください。
バーニングモーニングですよお嬢様」

「もお、何がよ……………うるさいわねえ。いったいゼンたい何が燃えて
るのよ……………」

専属の召使いである『コウちゃん』が今日も私を起こすという名
目で、乙女の寝室に侵入するという重罪極まりない行為に明け暮れ
ている。

もう私も10歳の立派な乙女だというのを理解しての行為。それ
は犯罪だと思っているのだけれど、まあ仕方がないから（一人じゃ
起きられないからじゃないわよ）今日も起こされのだ。

とにかく犯罪に違いはないのだから……………だから一生私の面倒を見
てもらおうと思ってるわ。

「お嬢様、コチラ本日のお召し物セットでございます」

「ちょッ、ちょっと！！ やめてよね！！ 勝手に私の衣装部屋に
入るの止めてよね！！」

「はあ……………と言われましても」

「コウちゃんセンス無いんだもの。今日は私が選ぶ日なのです！！」

「承知しましたお嬢様。このコルケウス・マーベル・シユテー―

――」

「いいからいいから。コウちゃんの名前長いから。コウちゃんとい
いから」

「はッ。それでは失礼して……………コウちゃん的にはあ、お嬢様のがセ
ンスないっていうかあゝ」

「ちょッ何ですよ！？ なんで口調まで！？ 調子ノるんじゃないわ
よ……………ったくもお」

「それにしてもお嬢様。衣装部屋まで如何なされますか？」

「……………」

「お車の準備いたしましたでしょうか？」

「ちょッあんた何を言ってるのよ。衣装部屋ってそのドア開ければ直ぐじゃないの」

「ええ、それは承知の上でございますが……」

「……？ 歩くわ」

「な、ななな、ななななんと！！！！！！！！ 素晴らしいです
お嬢様——」

「うつさい！！ そこまで人間腐ってないわよ、まったく……
……あいたッ」

「え、どうされました？ ベッドから降りただけなのにどうされましたお嬢様！？」

「…… 足くじいた。だっこ」

「……… はい」

洋服なんて何でもいと思うのだけれど、適当に選ぶと母上がるさかつたりするから仕方なくそれなりに気合を入れなければなら
ない。

何か特別な事がある日、例えばパーティーなどはもっと気合を入
れなければならぬ。

でも、それなりともっとの間にそれほど差はない。用は気の持ち
ようだ。

まあ、今日はもう足が痛いので着替えはコウちゃんの指示に従お
う。

「「姫子お嬢様、おはようございます」」

コウちゃんの御姫様抱っこのまま1階に下りた先の長い廊下には
我が家の召使い達がずらりと私への花道を作る様に整列していた。

その花道の先の一室が食堂であり、そこに待ち構えるのは母上だ。婆が眼鏡を光らせるのを見て、私は溜息をついた。

「んまつ。姫子、何をしていますのですか!？」

「うえー？」

「なぜ自分の足で歩いていないのですか!？ 失望しましたよ、親子の縁を切りましょう」

「へーへー」

「んまつ。ワタクシの話が聞けないと言うのですか姫子!？ 姫子!？ 聞いているのですか姫子!？ ちよつとコツチに来て話を聞きなさい——我が家から出ていきなさい!！」

「どつちだよ婆」

「どの口がそんな事言ってるの!？」

「あー？ やんのかあ婆!？ コウちゃん下ろして、コイツを始末するわ」

「やってやろうじゃないの娘……」

「はあ……またこの人たちは……」

食卓は、戦場ナリ。

人生は、戦争ナリ。

姫子は、「先手を打てば勝てる」そう思った。直感だ。だが、自分の力を信じる事は出来る。そして、自信はある。

唱える。

『祈リヲササゲルキミノムネ』

『永久ノ記憶ノサザナミノ』

『英知ヲアツメルキンナリ』

《——Wide cut——》

「スーパーソニック
超音速——」

鋭い刃が横一線。

刃の速さは音速。

敵は認識する事さえ出来ないだろう……。

もしもその刃を感じる事が出来た時というのは、天秤は死へと傾いた後だろう。

魔法の剣技とは、そういうものである。

「——あめえ、あめえよ娘」
「なぬっ」

殺ったはず、手ごたえはあった。それなのに——なぜ!?

「アタシを超えるには、まだはえーんだよッ!——!」

繰り出されたのは何の変哲もない物理攻撃——じゃないッ!?

「ぐッ——」
「ほお……よく見極めたじゃねーか」

避けていたら死んでいた。

拳から流れる気弾にロックオンされていた。

『えー、解説のコルケウス・マーベル・シュテインサイダー・トウ
エンティルヴァイシュ——』

『あつ、いいですよ。コウちゃん、実況侍女A』

『あつ、それではお言葉に甘えて……解説のコウちゃん、今のはど

「ういった攻撃だったのでしょうか？」

『そうですね、今のは」と長々と解説をしていきたくところなのですが、そろそろ放送時間が終了してしまうようです。なお『G-』にご加入の方はこのままご覧いただけます』

「それでは伝統の一戦、勝利の女神はどちらに微笑むのでしょうか」

「というわけでお嬢様、奥様、私はいつものように飛ばされますゆえ」

「あふwgf。whfgふおggふwvgbwvばうえv1
g:「」

「では本当にお時間が来たようで、また午後5時に戻ります」

「あw。 fぐヴおわ f vうおヴうえ hヴお wぐ!!!!!!!!!!!!!!」

コウちゃんと呼ばれ、執事服を身に纏った俺。
腕時計は午前9時を現していた。
その瞬間、この世界から姿を消した――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336ba/>

Princess × Princess ～8時間だけのお姫様～

2012年1月14日20時58分発行